
え、勇者！？こっちへ来るな！ 書き直し版

洗剤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

え、勇者！？こつちへ来るな！ 書き直し版

【Nコード】

N8027X

【作者名】

洗剤

【あらすじ】

『え、勇者！？こつちへ来るな！』の書き直しです

王城にて

盗人にもテリトリーがあり、この国の王が住む小山を使つた要塞を兼ねた大きな城。それを囲む貴族の居住区。それを囲む一般の人々の街。そのどこを誰が狙うかは、決まつた建物もなく、知る人がその場所を知る盗人ギルドのマスターとその他数人だけが中身を見れるという、特殊な名簿があつた。

無くてはならないそれが過去形なのはそれを持つていた幹部の一人が民兵団に捕まり、そのまま救出も間に合わず城へと連行され、名簿は解析されて載つていた人物の名前と似顔絵が町中張り出された。つまりは、王が命令を出し、盗人の排除に乗り出したのである。もちろん、優先されるのは王城を狩場としていた者たちであり、その中には俺も含まれる。

「くそつたれ……!!」

悪態をつきながら飛来する矢を避け、石の屋根を踏み砕かん勢いで弓兵に接近。腕と鎧を掴んで近くの兵士に投げつける。屋根の上だから落とせもしたが、殺すのは最終手段だ。恨みを買つたら長生きできない。

「囲め！囲んで仕留めろ!!」

今までの仕事の中でも何度か見かけた指揮官らしき金髪の女騎士が、制限なく城から湧いてくる兵士に叫ぶ。こちらに来る兵が多いということは、忍び込んだ同僚のほとんどは既にやられたか逃げ切つたのだろう。

騎士は世襲制ではない。有能であれば出世できる。彼女は見たと

ころ、自分と齡はあまり違わなさそうだ。

「はア！！」

掛け声と共に両手剣で切りかかってきたフルプレートの兵士に密着、柄を握る手を覆うように握り、足を払うと同時にねじって奪い取る。両手剣の扱いは訓練された兵士に遠く及ばないが、魔力で強化された筋力で叩き付ければ何とかなるだろう。

倒した兵士の首根っこを掴んで引きずりつつ、囲まれないように屋根の端へと走る。思ったより重い。

「諦める。今なら死刑は免れるかもしれないぞ」

「行つてろ、クソ女^{アマ}」

俺が端に着くなりかけられた女騎士の言葉に、倒した兵士の首元にある鎧の隙間から首に剣を触れさせながら返答する。

「盗人から強盗に転職にかもな。あんたは俺が転職すると思うか？」

空いた左腕で大げさなりアクションをとりながら言うと、苦々しい顔をした周りの兵士たちが二の足を踏む。勇敢な兵士ほど、人望は厚いだろう。特に、捉えてもほとんど得が無い割に、多少腕が立つ相手にも攻める相手には。

しかし、一本も矢が飛んでこないのは妙だ。そこまで信頼された奴なのだろうか。それとも、単に上手いやつが出払っていて、顔を隠すことを優先した服しか着ていない男を殺せないほどの下手糞しかないのか。

「その剣をどけてくれ。その人を死なせるわけにはいかない」

サーベルを鞘にしまいながら、女騎士が言う。

何者なんだこいつ・・・？思わず足元の兵士に視線を向ける。

「隊長、しかし！！」

一人の兵士がやりきれない様子で言うが、女騎士は答えない。

まあ、かといって身代金を要求する訳にも行かないし、殺すわけにもいかない。取るべき物は取ったんだ、市街地に逃げてさっさと撒こう。

「じゃあ、返してやるよ！」

足で搦り上げるように兵士を女騎士の方へ蹴り、足腰を魔力で強化して高い屋根の上から飛び降りた。

王城にて（後書き）

だいぶ変わりました。

新作の案があるからそっち書いた方がよかったかな……

逃走から数日（前書き）

久々に投稿。短いですが、時間がかかったわりには何をやっていたと思うほど短いです

逃走から数日

あの後、貴族の居住区をなんとか抜け、建物の乱立する市街地の教会に忍び込んだ。まさか、盗人が教会にいるとは思わないだろう。一夜が明けた頃にはそのままネックレスなどの小物を拝借した後、あまり繁盛していない店で換金。買値が安いのは分かっていたが、仕方がないだろう。フードをかぶって口元しか見えない客から買ったんだ、どんな商品か気付いているはずだ。

そして現在。適当な酒場に入り、街中で接触した同業者から得た情報から推測される盗人ギルド自体の状況にため息をついた後、三杯目のビールを呷った。

椅子が二つだけの丸テーブルを使っているため、周りを気にしなくていいのは助かる。

聞き込みで分かったのは、長はおそらく大陸へ渡った事。七割ほどの構成員が捕まった事。そして、ほぼ全員が処刑された事。自分の仕事ができる場所が増えるからいいが、いくらなんでも早すぎる。それに、長はなぜ大陸へ渡った？この国ではもうできないと思っただか？いや、そんな事を考える人でも、ましてや臆する人でもない。

まさか、裏切ったのか？

「ちよつといいか？」

汚れた木の机に目を落としていると、右後ろから中年の男の声がかかった。何かと思い顔を上げないように振り向き、その姿を確認する。整った装備に紋章なので衛兵と確定。

「昼間から酒とは感心せんな。仕事はどうした？」

その後ろには、何人かの若い衛兵。恐らく、仕事はこんなもんだと教えるために連れてきたのだろ。厄介だな……

フードを被ってるが、黒っぽい服なのが災いしたのだろ。白い方を盗ればよかった。

「出稼ぎに来たんです。しかし、そろそろ故郷へ帰るので最後の酒です」

ジョッキを握ったまま丁寧にそう言つと、男は鼻で笑つてこつ言つた。

「それは結構なことだな。まあ、せいぜいがんばれ」

解雇されたとも思つたにしても、嫌な性格だなこいつ。今度会つたら、その嫌な声を発する唇を引きちぎつてやろ。

再びジョッキに口を付けると、男は部下を連れて酒場から出て行つた。

そろそろ俺も行くか。大陸に渡り、長の真意を確かめよう。

「ちよつといいか？」

席を立とうとした時同じセリフだが、聞き覚えがある声であり、二度と聞きたくない声が聞こえて一瞬硬直するも、すぐに平静を取り繕う。椅子に座り直し、先程と同じように少し振り向く。

鎧ではない軽装だが、王国の紋章の入った衛兵の物。細身の体に、正面から見た限りでは肩の位置よりもより長い金髪。あの時の女騎士だ。

「……………何か？」

念のために隠し持っている短刀を抜けるように意識しながら言う。声を覚えられている可能性は否めないが、無言でいても怪しまれるだけだ。……………ああ、久々に見つかったからか調子に乗った俺の馬鹿野郎。

「満員なんだ。隣に座ってもいいだろうか？」

「いえ、そろそろ帰るのでお譲りしますよ」

顔に笑みを貼り付けて答え、席を立つ。

二回も衛兵に声をかけられるなんて、今日は厄日だな。

出口であるボロい木の扉へ、所々に集まる数人を避けながら向かう。情報交換の場所なのか、衛兵が多い。

十数人か。出口付近に数人の集まりが立っているし、さっさと逃げるか。

「君、落し物だ」

女騎士のその言葉に振り向くと、筒状に丸められた紙を赤いリボンで丁寧に巻いた物を投げ渡された。何だこれ？

心当たりが全くない物だが、とりあえず開けてみるか。いい物ならもらっておこう。

「む……………」

開けると、それは三枚の紙であることがわかり、声を漏らす。何せ、一枚目が白紙なのだ。続けてめくるが、二枚目も白紙。二枚目を捲ろうとした時、背後から微かに柄に触れたことによる音が聞こ

えた。正面からは、二人の衛兵が歩いて来る。その目つきは鋭い。

……… やっぱりフードは怪しかったか。先手必勝だな。

正面からくる衛兵が、武装した男の横を通るタイミング。その時に正面にいるように歩幅を計りながら歩き出す。それに警戒したのか、正面から来る衛兵が短剣の柄を握る。

そして、衛兵が男の横に来たところでピタリと進めていた足を止める。すると、訓練通りの行動をとる衛兵は、その場で立ち止まる。

「俺を捕まえに来たのか？」

挑発できるか声をかけてみるが、返答はない。まったく、おもしろ味の無い奴らだ。

袖の中にしまっている液体の入った小瓶。その存在を確認し、口角を釣り上げてみる。

「魔力を籠めただけで大爆発する液体、知ってるか？俺は知ってる」

衛兵は狂言だと思ったのであろうか、ついに短剣を抜くと、一歩と近寄り始めた。後ろからの足音も同様だ。それと同時に、俺はニヤニヤと笑みを浮かべたまま掌に瓶を滑り落とし、一気に魔力を籠めた。

小規模の爆発によって火の手が上がった酒場から、一気に客や従業員が流れ出した。爆発を起こした後は、その中に紛れ込んでその場を離れた。道にいた人々も加わり、増えた逃げる群衆から一人を探すなど無理に決まっている。しかし、印象が強かったため、この格好は確実にマークされてしまうだろう。適当に見繕って着替えな

ければ……。

これで窃盗、放火に殺人未遂と王城への不法侵入。あげくの果てには逮捕に抵抗。もちろん、一発で縛り首だ。まあ、あのままじゃ逃げ切るのも危うかったし、別にいい。それに、あの二人の衛兵が長い休暇を取れるのは確実だから本人たちも納得するだろう。ガラス片に顔面などの露出した部分を切り刻まれたんだ、それだけじゃ死にはしないし名誉除隊にもならないだろう。

死なないなら儲け物だ。さて、適当な家に忍び込むとしよう。それと、今度は衛兵に見つかったら、そいつの喉を潰してやろう、そうしよう。……その場合は、殺したほうが恨まれない事ないか？ 声を出せないというのは苦痛だ。

よし、次は逃げるために殺そう。喉を潰してから殺そう。

大陸へ

あの後、数回服装を替え、更には染物で髪の色を黒から金に染めるなど手の込んだ事をし、顔を隠すように包帯を巻いた上から、まるで火傷の痕のようなへこみのある布を張り付ける。そして、その上から包帯をさらに巻けば、あつという間に別人だ。息苦しいのと蒸れて暑いのは、少々の事だと我慢しよう。目の色も染めたかったが、致し方ない。

そして、腰に普及しているロングソード、背には盾を背負えば流れ者の完成だ。仮に疑われても、頬を触らせれば、見せたくない傷があるのだと納得するだろう。

「まったく、何でこんな面倒なことを……」

自分がへまをしなくても、他人に引つ張られて大変な目に合うのはもう願ひ下げだ。客を覚えない店で買う染料は、通常の二倍ほど高かった。だが、背に腹は代えられない。長に会ったら代金を請求してやるのか……。

長は見た目を魔法で変えているだろうし、武器も変えているだろう。探し出して見つけるには、触れて直接魔力の質を探るぐらいしか無いだろう。とはいえ、あてが無い訳ではないから詰みではない。

王都の南の城壁にある出口。この島国は大陸から北西にあり、王都は国の中心にあるので大陸に行くには必然的にこの出口を使う。

もつとも、商人が絶えず出入りするおかげで、高さが十数メートル横幅が数メートルという巨大な扉も、その内側にある格子状に丸太を組んで作られた落とす仕切りも、夜以外は開きっぱなしだ。まあ、内戦だらけの大陸なら露知らず、三百年も前に統一されたこの

国ではほとんど観光名所だ。人間がこの国を統一する前には、巨人の侵攻を食い止めたと言われている。もっとも、その巨人達をどうやって一掃したかは疑問が残るが。

「ん？」

門の前に着いたところ、人が衛兵によって並ばされている上に、荷物や人相を確認されている。検問だ。

予測はしていたし、話にも聞いていた。だから変装モドキをしてきたのだ。しかし、そうであってもやはり怖い。

「よし。次！」

そうこうしている間にも、衛兵は血走った目で検問に並ぶ人を進ませる。

見ているも仕方がない、並ぶか。

石畳の上に連なる列に並ぶと、皆が口々にこの騒動の原因、つまり俺たちに文句を言っているのが聞こえる。文句なら、検問なんてものを考えたヤツに言えよ、俺達は知らん。

「よし、次！」

男の衛兵は大きな声で言う。

それにしても、やけに高圧的である。城壁を乗り越えたい所だが、前述した扉より五割ほど高い上に、大通りほどの広さのある壁上には衛兵が配置されている。乗り越えるのは不可能だ。門を通るしかない。

「次！」

あと一人で俺の番だ。気付かれたなら、馬でも奪って逃げよう。蹴散らすにしても、十数人と数が多すぎる。

ふと思案から我に返ると、前の前に立っていた男が検査を受けている。が、なにやらもめているようにその顔を見たところ、貴族街を中心に働いていた時の同僚だ。

これはちょうどいい。そのまま騒ぎを起こしてくれ。

「人違いだつて言つてゐるだろ！」

「黙れ！手を挙げて地面に伏せろ！！」

暗器を警戒したのであろう、衛兵は三人ほど槍を突きつける。確かあいつは鍵開けが得意なだけで、そんなに強くはなかったはずだ。もう終わりだろう。

「クソッ！俺はやってない！！」

そいつはわめき散らすように言つと、剣を抜く。今だな。

懐から煙幕玉となる拳ほどの球を取り出し、足の甲の上に落とす。そして、予備動作なしに槍を持っている衛兵の一人に、顔めがけて蹴り上げる。

「うおっ！？」

飛んでくる物体を察知して反射的に叩き落とそうと衛兵は腕を振るい、鉄の手甲が球に直撃する。強くたたかれた球は破裂し、赤みがかかった白い煙が爆発のように広がる。それと同時に、勢いよく門へと走る。

大きな音も出るために、辺りは軽いパニック状態だ。それに、こ

の煙には唐辛子を粉にしたものを混ぜてあるために、一種の催涙ガスとも化している。それに、球が飛んできた方向は知られただろうが、あそこまで一人に集中していたのなら詳しい位置は分からないだろう。

そう願いながら、巻き込まれまいと慌てて逃げようとする馬車の荷台に積まれた藁に潜り込み、ある程度王都から離れるのをじっと待った。

歩きなども混ぜ、三日ほどかかって港街に到着した。道中に検問などは一切なく、安心して移動ができたのは幸いだろう。まあ、今から船に乗り、五日ほど波に揺られるだけの簡単な旅だ。よほどの事が無い限り、大陸には楽にたどり着けるだろう。心配なのは天気だけだ。さて、それじゃあ早速、船に乗ろうか。

大陸へ（後書き）

いろいろなイベントを入れるべきか悩みましたが、やはりこの短さになっ
てしまいました。大陸に渡ってからは、長くなると思います。

大陸へ？（前書き）

たいへん遅れました。

大陸へ？

腹ごしらえを済ませた後、ふらふらと港付近を彷徨っていると人がある方向に集まりつつあるのが分かった。人々は焦ったような様子で、中には剣の柄に手をかけた騎士もいた。

普段ならただの揉め事と判断して逆方向に去るのだが、入港所の方での揉め事に人が集まるとは明らかに異常だ。とにかく行ってみよう、面倒そうなら逃げればいい。

そう思いつつ、彼らの後を追った。

「クソッ、まったく見えん」

人垣までたどり着いたのはいいが、人が多すぎると背の高いのが多い事もあり、まったく何に人々が集まっているのかが見えない。仕方なく人ごみから抜け、一度裏路地に入ってから三角跳びを使い、近くのベージュの壁の建物の屋根に上った。二階建ての建物だが、人垣の向こうを強化した眼で見ると十分だろう。

「……おいおい、嘘だろ！？」

それを見た瞬間、隠れる事も忘れて思わず声を上げてしまった。穴の空いた国旗を掲げた、この国の王城直属の部隊であるリーン騎士団が持つ大型キャラック船。砕け、火を消した跡がある甲板。そして、敷かれた布の上に並べられた、すでに事切れて布をかけられたその騎士達。それを悔やむように見る同騎士団の騎士も、皆どこかしらに包帯を巻いている。

リーンの騎士はこの国が誇る屈強な騎士団であり、そこいらの冒険者なら数秒もかからずに倒せるほどの腕前を持つ。その彼らが船に乗っていたとはいえここまでやられるとは異常も異常だ。

「……それにしてもリーンはまずい」

リーンの騎士は重装備でも、その一つ一つに肉体強化の魔法がか
けられているという。追いかけられればかなり危うい。

見られる前にと裏路地に飛び降り、この様子では出港はすべての
船が遅れそうなので宿を取るためにその場を去った。

翌日早朝。汚い宿のベッドから弾かれるように飛び出し、投げ捨
てるように金を払いながら宿を出る。

港の端に行けば、リーンの騎士に驚いた同業者や、指名手配でも
された奴らが予定を早めて大陸へ行こうとするはずだ。その船に乗
れば、なんなく大陸へ行けるはずだ。

推測がほとんどだが、下調べする時間もほとんど無かったので仕
方がないだろう。ダメならば、それこそ船を奪ってでも大陸へ行こ
う。多少無理があるが、がんばればどうにかなるはずだ。

港に一番近くて安い宿だったために走っているうちに、同じ方向
に走る浮浪者や旅人を見つけた。互いの姿を見ると軽く会釈を交わ
し、扇動する一人のアイパッチをした男を追いかけて走る。

どうやら正解のようだ。あとは、騎士に止められる前に出港さえ
できれば問題ない。出港すれば海までは追って来ることはないのだ
ろう、陸ではリーンの騎士が呻いているのだ。

「金を払ったらさっさと乗りな！持ち場は中で言い渡す！——
ただし、三倍払えば何もしなくていいからな！」

海賊らしき黒髪の男がサーベルを片手に追いつ立てるように言う。
その上からの物言いに苛立つ者もいるが、大陸へ渡る決断をした者にはそれに食って掛かるような馬鹿はめったにいない。めったに。だから彼の足もとに倒れている男なんてのは見えないし、握る剣が血糊で赤く染まっているのなんてのは見えない。

「今回はいくらだ？」

死体を踏まないように近寄り、その男に聞く。

「お、兄さん若いね、何をやらかしたんだい？」

男はこつちを見ると、ニヤニヤとした笑みを浮かべながらこちらを見る。

「無実だよ。さあ、いくらだ？」

「あらー、無実がやけに多いね。あんたで二十三人目だ」

そう言う男の声は中性的で、バンダナも相まって性別が判別できない。もしかしたら女なのだろうか。しかし、それっぽい匂いは潮風のおいで上塗りされていて分からない。

「それはそれは……。不当逮捕が多いこつた」

金貨を手渡し、横を歩いて抜ける。

その際に再びにおいを確認しようとしたが、視線が鋭くなったので諦めた。

まあ、反応からおそらく女だろう。色気が無いな、ほん――

――。

「あ、悪い悪い。手が滑ってな」

背後からはへらへらとした声が聞こえるが、自分の背中に刃が付きたてられているためにゆっくりと振り向く。

薄皮を刺されたところで反射的に強化で防げるほどゆっくりであったが、なぜか冷や汗が出た。ちなみに、彼の目はまったく言っていないほど笑っていない。

「そ、そうか。じゃあ、俺はもう行くからな！」

剣を振り払い、早足で船の中に入る。その間にも、氷とは違った冷たさの視線に背中を刺され続けた。

得に大変な思いをすることなく出港を済ませた後、割り当てられた仕事場所でマストの最上部にある監視場所で辺りを見渡していた。何か異常があれば、大声で伝えろという事らしい。楽な仕事に思えるが、強い日光と潮風によって喉が渇くのだが、一日あたりに一人が使える水の量は決まっている。

つまり、下手をすれば熱中症で倒れ、何か異常事態が起こるまで気が付かない可能性もある上に、属性の都合上と言うべきなのか日航がとても苦手だ。

「暑い……」

照りつける太陽を見つめながら呟きつつ、顔に巻いた包帯に汗がしみ込むを感じる。

どうせなら人を見分ける特徴となる鼻や唇を削いだ方が涼しかったかと思っただ、今さら後悔しても遅いので仕方なく包帯を外した。この場所だ、夜まで交代も無い事だし外しても構わないだろう。

それにしても、交代が無いというのはそいつを殺す気でもあるのだろうか。

昨日の騒ぎからか漁船一隻いない海を見るが、広いだけで何の感慨も湧かない。ただ青いだけの海をみんなは綺麗と評すが、これのどこが綺麗なのか分からない。暇だからこれについてでも考えてみるか？ いや、体力の無駄だからやめておこう、死ぬ。

「ライムでも食うか……」

多少なりとも喉が潤うので、ウエストポーチから取り出したライムの皮をナイフで削いで中身を食べる。

これは意外に高い物だが、これが無いと壊血病にかかってしまうので仕方ないし、買ってないのでかなり得した。

二個目のライムの皮をむき出した時、誰かがここに近づいて来るのに気付कि、慌てて包帯を顔に巻く。

「よう、意外と大丈夫そうだな」

そう言いつつ上がってきたのは、船に乗る際に見た男装癖の女だ。

「何だ？ 暇なら変わってくれ」

「嫌だね。交代なしで見張り何て願い下げだ」

そう言つと、女は俺からライムをナイフごと奪うと、手際よく向

いてかじり始めた。

「おい」

何をしゃがるこの女は。しかも抜身のナイフを素手でライムと一緒に掴むなんて、その正気を疑う。

「いいだろ？ ジュースにしたのやるからさ」

女はあつという間に食べ終え、ナイフをこちらに差し出しながら言った。

ジュースか……。それならいいか。

「仕方ねえな……」

「現金な奴」

そう言つと女はクスクスと笑い、水筒を手渡してきた。

「ほら、飲めよ」

お言葉に甘えてそれを飲むと、スツキリしていてかなりうまかった。二口目を飲もうとすると、水筒を奪われた。

「一口目でけっこう飲んだだろ。で、どうだった？」

「うまいな、それかなり」

女はそれをガブガブと飲むと、嬉しそうな顔をしてこっちを見た。

「だろ！？いやー、やっとこれがうまいって言ってくれるヤツがいた。どいつもこいつも脂っこいのがいいやら、酒がいいやら言いやがってな」

そう言う女を煩いと思いつつ、水平線へと視線を移す。

見張りに忙しいってことで下に行ってくれるだろう。それに、何をしにここに來たのだから……。

「ところで、名前はなんて言うんだ？私はポラリスだ」

女が自己紹介するも、それよりも彼女の一人称が『私』だった事にとても驚いた。

「あ、ああ。俺はロイバーだ。よろしく」

もちろん偽名である。

「ロイバー？変な名前だ」

そう面白そうに言う女の声が背後から聞こえる。

「お前だって人の事言えるか？」

そう言つと、苦笑いする声が聞こえた。小さな笑いで潮風にかき消されそうではあったが、近かったのではっきりと聞いていた。

「いいんだよ。親父も船乗りでな、北極星みたいになれってことで名前を付けたんだ」

それはいいとして、もうちょっと工夫してやれなかったのだろうか

か。目印にされる星といっても、そのままじりもせず、名前にするのとはどうかと思う。人のことは言えないが。

「そうか、ならいいんじゃないか」

暑いというより熱いので、返答する気力もなく適当に返す。

その返答に複雑そうな表情をしているであろうことが予想できたが、特に言う事は無いので振り向きもせず、見張りという名の新手の拷問に集中する。

「ん？」

海面に映る黒い影を見つけ、目を強化して注意深く観察する。

その速さはこの船と同等であるが、かなり離れているので狙っているという訳ではないだろう。しかし、その影が魚とも似つかないので、疑問に思っ、て背後を向く。

「おい、ちょっと」

「ん？」

下へ降りようとしていたポラリスを呼び止めると、影のある場所を指で指示す。

「あれは何だ？」

言いながら再びそこに視線を移すと、影は忽然と姿を消していた。

「どうした？何かあったのか？」

「いや、あの辺りに何かの影――」

そう言いかけた途端、真上から何かが急降下してくる滑空音がした。このままでは衝突すると直感で感じ、ポラリスの腹に手を回すように抱えてマストから慌てて飛び降りた。腰の辺りで何か言っているが、そんなのに構っていては押しつぶされる。

しかし、それよりも前に上空から炎が滝のように降り注ぎ、一瞬でその中に巻き込まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8027x/>

え、勇者！？こっちへ来るな！ 書き直し版

2011年12月20日18時45分発行